

[dōnk]

DONC どんく

発行

三重日仏協会

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE

事務局 津市東丸之内21-4 オーデンビル

3F / Siegf: Oden Building 21-4 Higashi-

Maruochi Tsu JAPON ☎0592 (26) 3159

N° 20

le 3 mars 1992

SOCIÉTÉ FRANCO-JAPONAISE DE MIE



2 / 15 鈴鹿市 〈地域の国際化を考える集い〉

三重県内の在住外国人は、いま 15,000 人を超えたといわれ、「地域の国際化」は必然的なものとなっています。この問題を地域住民と外国人のそれぞれの立場から考えようという表記の集いが、県国際交流財団などの主催で開かれ、日仏協会からもフランス人二人を含む7人が参加しました。

記念講演で国連地域開発センター主任・モンテ・カセムさん(スリランカ)は、いまは国家・政府を越えて地域の中小企業や自治体が直接国際交流をする時代だと述べるとともに、観光ビザなど不法な方法で無数の外国人が入国就労している現実について、これは抗えない「経済の力」の表れで

あり、政府は早く法的に認めるべきだと指摘しました。



2 / 13 ~ 津市 '92 フランス語入門講座

恒例の入門講座は、17人の受講生を迎えてオーデンビルで開講されている。

今年は、三重大学の渡辺先生と、J-F. ダムム先生が12回を交互に担当していただくというシステム(初回と最終回はお二人も)。

まだ教室のスペースに少し余裕がありますので、途中からでも受講希望される方は申し込んでください。

2日半のフランス

喜田 絃 美

昨年10月、文部省教員海外派遣の機会を得て、1カ月間ヨーロッパとアメリカの特殊教育を見学することができた。懐具合の良くない三重県では補助金も少なく、「すみませんね。新車が1台飛びますよ」と言われての出発だったが、私は車を持たないし、気候の良い10月に1カ月も職場を空けられるなんて、まさにジェドラチャンスではないか。それにお金を出さない代わりに口も出さないという三重県方式も満更悪いばかりではない。21人の団員中、女はただの2人であったせいか、かなり気ままな行動も黙認され、学校訪問や教育施設見学の日以外は極力群れから離れ、2人でひたすら動き回った。

イギリスの学校訪問地コベントリからパリに着いたのは10月10日の夕方。フランスでは教育視察は全くなく、2日間のパリがあるだけ。どう過ごそうかと心は弾んでいた。到着したドゴール空港は折しも清掃作業員のスト決行中、ポーターも現れず自分達で重い荷物を押して表に出ると、ごみ箱からはごみが溢れ、スト中の人々の群れから喚声があがる。バタバタ走り回る作業員のおばさん。パトカーのサイレン。「なんだか凄い所へ来てしまった」と思いながらバスに乗り込む。連れて行かれたのはパリのはずれのJTB直営ホテル。日本式経営が気に入らないのかフロントマンはいつも機嫌が悪い。「ハイウェイのジャンクションの中に孤立していたコベントリのホテルの不便さに比べたら、メトロが近いだけマシだわね」と慰め合って、パリでの予定を立てる。

その夜はバトームーシュに乗ることにした。6時30分発の船に乗るには既にぎりぎりの時刻、慌ててメトロの階段を駆け降り、アルマ橋に急ぐ。今にも出ようとする船を横目で睨みながら切符を求めると「デペシェヴ！イソイデ イソイデ！」と売り場のマドモワゼル、

突然の日本語にズッコけながら船に飛び乗るとすぐ出航。甲板に上がると、同じ団の奈良氏が両手を広げるようにして私達を迎え「あんたら、よう乗れたなあ」。初めてのパリにしては彼もなかなかやるもんだ。3人で夜のセーヌを楽しんだ後、アルマ広場近くのビストロに入る。「この店には肉はないよ、魚だけだよ」と言うギャルソン、こちらのフランス語は無視して一生懸命英語で話す。昔は英語が無視されたのに……。「けさ髪を切っただけだよ、この髪型どうだい？」と、鬢を刈り上げたトサカ頭を自慢する。よく冷えた生牡蠣と白ワイン、料理はなるべく内容がわからないものを3人がそれぞれに選んで、皆で試食をするというおのぼりさんスタイル店は9時頃から立て込み始め大忙しのギャルソン、それでも通りすがりに「セボン？」と聞いたりウインクしたり、なかなかの愛嬌者。料理もそれぞれに美味しくて、全行程食事付かずの30日間で、いちばん心に残る晩餐となった。

食後は、ジョルジュ5世通りを通って凱旋門まで散歩。「渡るぞー！」という奈良氏の掛け声で、凱旋門をロータリーにしてビュンビュン流れる車の間隙をぬって門の下に走り込んだ。真下に立ったのは初めてで、思ったより巨大なアーチに圧倒される。中心には無名戦士の墓、飾られた花輪の中で、不滅の灯のやわらかい光が揺れている。遠くにデファンスのアーチもくっきり見えた。ホテルに帰ったのは12時前。

2日目はお決まりの市内見学。私はループルで皆と別れることにする。

ノートルダム寺院の回りには観光バスがひしめいている。旧東ドイツからのバスだという。ドイツ統合以後、東側から続々と観光バスがやって来て、昼は絵葉書や小物を売り、夜はバスの中に寝泊りして、トイレなどは公



シャルトルの大聖堂

共施設を使って暮らす、いわば偽装観光客。フランスの社会問題になっているそうだ。寺院前の広場は観光客と物売りでごったがえし異様な雰囲気だった。地続きの国では他国の政変も他人事では終わらない。

凱旋門の横を通ったとき、「交通事故が多いから、絶対に、この車道を横切ったりしないでください」とガイドさんが言った。でも私達は昨夜既にやってしまったのだ。ヒンシュクを買いそうなので3人とも黙っていた。

ルーブル以後別行動をするため荷物や傘を持って中に入ると、入口でクロークに預けるように言われた。クロークのマダム、「カメラは？」と聞く。荷物の中と言うと「写真が撮れるから持って行きなさい」と預けた荷物をわざわざ出してくれる。美術館で写真が撮れるというのは、たとえ撮る気がなくても、大変なもてなしを受けた気がしていつも感激してしまう。

ひとりでルーブルを出たあと、雨の中をセーヌに沿ってしばらくぶらぶら歩いた。長期間の団体行動では時々ひとりが恋しくなる。小雨に煙るシテ島は墨絵のような風情があった。夜はホテルの部屋でイギリスの学校訪問のレポートを書き上げる。

3日目はパリを離れ、彼女と2人でシャルトルに行った。かねてから行きたいと思っていた所だ。モンパルナス駅から車でシャル

トルに向かったため、[麦畑の向こうにそびえ立つ大聖堂の遠景]を見るには至らなかったが、1日ゆっくりとシャルトルに遊ぶことができた。この日ばかりは片言のフランス語が大いに役立って嬉しかったし、カテドラルのステンドグラスの幻想的な色彩が今も目の奥に焼きついている。

1カ月間、ジプシーのようにいろいろな土地を巡って得たものは何だろう。日常からの解放感、様々の新しい発見、初めて出会った国への新しい興味、日本に暮らせることへの幸福感。一介の旅行者には、国によって体制の異なる教育は、比較するのも真似をするの難しすぎてただ眺めてきただけ。やはり研修は個人型、滞在型であるべきだろう。

旅が終って思い出すのは、すべて小さなことばかり。友達になる暇もなく行き過ぎた人々のまなざしや表情、子供達の笑顔、赤茶けた大地、レストランのポスター、街角の音楽家、咲いていた花の色、鳥達の振る舞い、落葉の散る音。そんなものを思い出すたび、優しい気持ちが蘇る。それぞれの場所で懸命に生きている人々、動物達、木々や草花。思い出すと私も元気が湧いてくる。『チキウガヘイワデアアルタメニワタシモナニカシナケレバ……』。機会を与えてくださった全ての人々に心からMerci beaucoup!

連載 フランスのお酒 (6) Appellation Non-Contrôlée

近年、日本でもワイン消費量が増加したようだが、どのように飲まれているのか？ 知るかぎりでは、その愛好者の多くに二つの特徴があるように見える。一つは高級一流ブランド志向で、「通」の話や物書きの描写にも Romanée-Conti とか Chateau Mouton-Rothschild の誰その名画入りとかがしきりに出てくる。今一つは成金的趣味で、多様多種のごちそうがテーブルに並び、日本酒、ビール、ウイスキー、ブランディー、それにワインも、しかも特級品ばかり同時に供されるといふあの形だ。何の分野をきわめるにも最高のものみに接しようとする態度は大切なことだろうが、この形では真価を享受していないのではないか。

日本に輸入されるほどのワインでは、びんの étiquette にはその造り酒屋、村あるいは地方の名や醸造年号とともに、その名の呼称規制にかなう品質であることが表示されている。Appellation Contrôlée がそれだ。

いつもは研究所の cantine で昼食をすませている仕事仲間が、ときにうちつれて近くの気のきいたレストランに行くことがあった。一つのテーブルに着いても Hors d'Oeuvre から Dessert にいたるまで皆それぞれに好きなものを注文するのだから、そのときのワイン選びは至難のわざとなる。料理にもワインにも教養の深い彼らだが、たがいに謙譲の美德を發揮してその任をゆずりあうときの弁...

「おれなんか、いつも Appellation Non-Contrôlée ばかり飲んでいるからなあ...」。

(Ours)

国際化を体現する仏人先生

鈴鹿市・瀬古・祐子 (主婦 54歳)

先週、部屋や家具に関係を引き込んで下さいます。に、知らず知らずに私たちが

私に週に一度、市の国際交流協会の主催するフランス語講座に通っています。先生は三十代のすてきなフランス人男性です。背が高く、ハンサム、とても明るくてやさしく、身ぶり手ぶりよくしくユーモアを交えた楽しい授業

← Qui ça ?

2/11

朝日新聞 『声』欄より

CINEMA

「マルセルの夏」 La gloire de mon père
「無秩序な少女」 Les enfants du désordre
フランス映画二本立ての特別上映会
3/14 (土) 津リージョンプラザ
津シネマ・フレンズの主催。同封のチケットを示すと前売り並の 1,200円で鑑賞できます (当日1,500円)。
なお津シネマ・フレンズでは、このあと「マルセルの城」、「髪結いの亭主」など多くのフランス映画の上映を予定しています。

のある単語を習っていると、「あなたの家にはベッドがありますか」と質問され、ほとんど「はい」と答えます。先生は「私はノン・ジュノンネパね」と言われ、世にふとんを敷いて寝ておられるのことでした(フランスのお宅でも)。また、日本人の私たちでも最近あまり使っていないコタツを、先生は「大好き」と、その効用をあげて愛用を強調されました。

私たちがあちらのいすやベッドの生活を探り入れたのと同様に、外国人が日本の生活の良い点に目をつけて活用されていることに驚きを感じるとともに、国際化とはお互いが見えない長所を気付かせ合い、高め合っていくことではないかと実感しました。
そして、先生の柔和な笑顔と柔軟な心が、私たちを「フランス大好き」と言わせる原動力となっていることを知り、国際化を押し進めるものは「人格」であることも知りました。